

第27回 山片蟠桃賞 記念講演会 (2022年8月10日)

「東海道を歩んだ西洋人 大坂経由で長崎から江戸へ」 講演録

タイモン・スクリーチ氏 (国際日本文化研究センター 研究部 教授)

タイモン・スクリーチと申します。どうぞよろしく願いいたします。

今日は、僅かな、70分ぐらいの時間で、皆さんと一緒に、東海道を歩いた西洋人の話をしたいと思います。

一番最初にこの題名をつくったときに知り合いに言われたのは、「君は江戸の研究者なのに、何で明治の話をするんですか」と聞かれたんです。というのは、江戸時代に西洋人が東海道を歩いたはずがないと人は普通に思っています。ただし、蓑先生がさっきおっしゃったように、ほぼ毎年、年に1回、オランダ商館の僅か2人、3人、4人ぐらいしか参加しなかったんですけれども、長崎から、もちろん大坂経由で江戸に行きました。将軍の謁見のために、いろんな情報交換、プレゼント交換もありました。それを今日、話題にしたいと思います。

ただし、本論に入る前に、蓑先生がおっしゃった鎖国という言葉についてご一緒に考えてみたいと思います。〈図1〉

「鎖国」というのは日本語ではありません。江戸時代では「鎖国」という言葉がなくて、「鎖国」の例がありませんでした。「鎖国」はラテン語ですよ。もともとラテン語で、どういうルーツでこの言葉が日本に入ったかということをご紹介したいと思います。本当に不思議なことです。

幕末になるといきなり、志筑忠雄という天文学者がこういう言葉をつくったんですね。基本的に「鎖で縛られた国」という意味で、まさか徳川幕府が法律用語としてこの言葉をつくったはずがないんです。すごくひどい言葉ですよ。まるで日本が囚人の刑務所になるみたいなもので、この天文学者が1850年にこの言葉を出版しました。前につくり出した言葉ですけれども、あんまり流布しなかったんです。わざと幕府を批判するためにつくった言葉です。鎖国の例が法律上にありませんでした。

志筑がどうやってこの言葉をつくったかということ、オランダの書物から取ったんです。Engelbert Kaempferというドイツ人でしたけれども、オランダ商館附属の医者として、元禄時

代に日本に来ました。2回、参府ですね。2回、江戸に行っていました。帰国したときに、自分の日本に対しての思い出の、半分が日記、半分が日本文化の紹介とか分析の書物ですけれども、一生懸命に書きました。長い本です。残念ながら、出版者を見つけることができませんでした。人が興味なかったんです。Kaempferはがっかりしたでしょうけれども、原稿も眠ったままで彼が亡くなりました。

何十年か後になって、イギリスの医者がKaempferの母国のドイツを旅行したときに、その原稿が見つかりました。ロンドンに持ってきて、翻訳しました。Kaempferの日本の鑑賞文が1727年、英語で「History of Japan」、日本語では普通「日本史」と翻訳しますけれども、その本の中に、Kaempferがもともとドイツ語で書きましたけど、英訳では「Japan is Shut Up」。「閉められた」という意味です。全然「鎖国」とは違うニュアンスで、Kaempferはどちらかというといい政策だと思っていたんです。ある意味で自由交流があるんだけれども、あんまり自由過ぎると、逆に国にとってよくない、と。

この英語で出た書物のもともとが、実はラテン語のKaempferのもう1つの原稿です。さっき申し上げたように、彼の日記と日本鑑賞文は残念ながら出版できませんでしたけれども、存命中に自分の日本の薬草に対しての研究をちゃんと出しています。お医者さんでしたから、日本の薬草を研究して、その本はやっぱりヨーロッパ中の誰にでも読まれたかったので、ドイツ語じゃなくラテン語で書きました。「Amoenitatum exoticarum」と決まった。今、現代につくられた訳語ですけれども、「廻国奇観」ですね。その本は医学研究ですが、最後にちょっと付け加えたところで、日本に対しての短い鑑賞文が出てきて、その中で「Japan is Shut Up」ということ。

というのは結論ですが、ラテン語から英語、英語からオランダ語、オランダ語から日本語、幕末になると。すると、みんな現代の人たちが、それは江戸初期からあった政策だと思っちゃうんです。これからそういうふうに思わないでください。鎖国の話をするお友達に出会ったら、「鎖国という言葉はラテン語なんですよ」と言ってください。

といっても、もちろん自由行動ではありませんでした。もう1つの単語をご紹介します。それは「海禁」です。「海禁」は本当に江戸にあった言葉です。「海を禁じる」、ですね。「海を禁じる」というのは、外国から物が入ることができなくて、外国人が日本に入ることができなくて、という意味じゃなくて、日本人にとって海が禁じられています。「日本人が海外に行っちゃいけない」ということです。

これは決して、徳川幕府の独特な政策ではありませんでした。東アジアの国々で、開国っ


てごく普通の政策です。徳川幕府が、海を禁じる前に、朝鮮王国と、あるいは明朝でも、両方とも海禁令がありました。これはもともと明朝の用語です。徳川幕府がこれを17世紀ぐらい、徳川3代将軍の家光の時代ですね。家康はもちろん全然こういうことを、秀忠でも全然こういうことは関係なかったんですけども、家光になるとやっぱり海が禁じられました。日本人が外国に行ってはいけないんです。

だけど、外国人には来てほしいんです。蓑先生がおっしゃったように海外の情報が必要でしたし、それと、日本はすばらしい国。ほとんどどんな植物でも、日本のどこかで植えたら芽が出る場合がありますけど、やっぱり日本でもないものがありますから、そういう海外の物が必要です。

江戸時代で特に必要とされ、要求された、当時の日本になかったものが3つありました。1つはコットン。綿ですね。もう1つは砂糖。サトウキビ。もう1つはいろんな医学。特に朝鮮人参ですね。僕は今日、アジアの話をする時間がないので朝鮮人参の話はしませんが、もちろんオランダ人あるいは朝鮮半島経由で朝鮮人参が日本に入りました。

それは今日の本論の序文の1つですが、もう1つ、東海道の話に入る前に申し上げたいと思うことがあります。

オランダは、当然、日本から非常に遠い国です。オランダから日本まで一気に行こうと思えば、やっぱり途中で休まないといけないとか、水を補給しないといけないとか、船乗りが死ぬから新しい人を雇わないといけないとか、風を待たないといけないとか、2年間ぐらいかかります。ただし、ジャワ島で、オランダがいわゆる海外州都をつくりました。バタビアという名前を名のっていたんです。現代のジャカルタですね。ジャカルタ。バタビアという名前が、オランダ人にとって非常に響きがいい地名です。バタビアがラテン語でオランダという意味ですね。だから、現代の政治制度とか経済じゃなくて、詩的な、美しい概念としてのオランダですね。日本式に言えば、日本と大和と和みみたいな違いですね。そのバタビアという名前をこの町につくって、そこからオランダのアジアの国々の間の貿易をしたんです。

これは18世紀の風景図ですが、まるでオランダに見えますよね。〈2〉

これはアムステルダムの風景図だと言ってもおかしくないんです。ただ1つ、アムステルダムとオランダと違うことがあって、後ろに山がありますよね。オランダはペったんこの国で、後ろに山はあり得ないんです。でも、それ以外、やっぱりこれは典型的なオランダの町です。

この周辺の、ジャワ島の君主が、大変怒っていたんです。自分の土地がオランダ人に奪われたからです。ただ、オランダ側が強いから、何もすることができなかったんです。大変怒

っていたんですが、結局オランダ人を許した。1つの条件があったんです。ジャワ島の人間を奴隷にしないことです。残念ながら東インド会社が奴隷制度を使っていて、奴隷を買ったり売ったりすることもありましたけど、奴隷を使っていたんですね。さっき申し上げたように船乗りがどんどん死にますから、オランダから出た船乗りは半分ぐらいが恐らくアジアまで着かないんです。ジャワ人以外の東アジアの人を船乗りの奴隷にさせたんです。

オランダからバタビアまで1年間ぐらいかかります。ここに着いたらみんなも休まないといけなし、船を多分直さないといけなし。貨物を下ろしたり、新しい物を載せたりする、それだけで何か月もかかります。

バタビアからあちこちに船が行きましたけど、今日話題にするのはもちろん日本に向かっていった船だけです。大体、年に2隻、日本に行きました。何で2隻送ったかという、1隻だけ送ると、途中で異常なことが起これば、万が一沈むと生き残っている人を救うことができませんし、情報を持って帰ることができませんから、1隻の船で動くのは非常に危険ですから、大体2隻一緒に動きました。

日本に行くためのふさわしい風が、この辺から春と初夏しか吹かないんです。だから、春、現代の陽暦で言えば3月ぐらいに出航して、長崎に向かって行って、大体長崎に入港するのは陽暦の5、6月です。物を下ろしたりして、日本から輸出する物を載せたりして、風が途中で変わるんです。日本から東アジアに行くための風が秋に吹きます。だから、船は、陽暦で言えば11月ぐらいに向かって帰らないといけなしなんです。ということで、半年ぐらい、2隻のオランダ船が長崎にありました。残りの半年ぐらい船はありませんでしたけど、船乗りが大体もう帰っちゃったんだけど、出島でほんの少しの、恐らく15人、20人ぐらいのヨーロッパ人が、半年後の次の船が来るまで待っていたんです。これは、川原慶賀（かわはら けいが）という有名な江戸後期の画家が描いた絵ですけれども、長崎ですね。〈**図3**〉

2隻のオランダ船。そのうち、1つは待っている。もう1つが小船に引っ張られて、持って帰る船で、左側に中国船もあります。さっき引用したEngelbert Kaempferによると、オランダからは2隻しか来ないんだけど、中国から毎年50隻ぐらい来ました。中国の船のほうが小さいですけども、でも、もっと物が来たし、人間もたくさん来ました。

それと、もちろん有名な出島が見えます。出島はよく扇の形の島といいますが、確かに扇の形ですが、本当は、江戸時代の人々にとってこれは扇ではなくて、月の形だと言っていました。本当の地名は、「月島」です。「出島」が固有名詞ではないんです。「出島」は、陸からちょっと離れたどんな島でも、「これは出島だ」といいますね。固有名詞じゃないんですが、

オランダ人も、僕もそうですけれども、「月島」という音がとても発音しにくいですから、結局、「出島（でじま）」、あるいは「出島（でしま）」をオランダ人が勝手に固有名詞にしまして、現代の研究者でも「月島」と言わないで「出島」と言います。

今日申し上げる暇がないんですけど、左側の四角の島が、それを中国人が使っていて、陸にあるところが唐人屋敷。屋敷じゃないんですよ。チャイナタウンですけども、唐人屋敷、という名前でした。出島からちょっとこちら側で、お城っぽいところが見えるでしょうかね。それは長崎奉行所です。長崎奉行所の辺の地名が江戸町（えどちょう）です。長崎で「ちょう」と言わない。江戸町（えどまち）ですね。徳川政権のことが忘れられないんです、江戸町（えどまち）と言っていますから。やっぱり江戸は長崎から非常に遠いですから、いつも將軍には長崎にどういうことが起こるかという不安がちょっとあったんですね。はっきり言って、密貿易だらけでした。だけど、長崎奉行には、一応、この町を治めるという仕事がありました。

長崎奉行が、徳川幕府の中の一番いい仕事の1つです。何でかというと、密かに儲けることができましたから。長崎奉行だけではなく、江戸の一番上の奉行が、ご存じでしょうけど、大体一遍に2名指名されますよね。1名が仕事をするんです。1名が1年間休むんです。長崎の場合、1年間長崎で仕事をやって、もう1人が江戸で休んで、秋になると交代するんです。それはとてもいいアイデアです。何でかというと、片側が変なことをすれば、次の人が入るとき、ばれるんですね。それが1つ。もう1つは、いきなり死ねば、その知恵が全部なくなって困るから、やっぱり2人いればそのほうが安全です。

ちょっと似ていることがあります。参勤交代も同じですね。参勤交代で1年間、江戸、いわゆる將軍の膝元に暮らしていて、休むということですね。1年間、自分の国に戻って、城下町に住みながら国を治めましたね。

実はそれとオランダ・カピタンも同じです。オランダ・カピタンは1年間長崎に行って、その後、帰国しないといけないんです。翌年また来てもいいんですが、ずっと住んではいけないんです。カピタンの下で、長くずっとずっと出島に住んで、20年間ぐらい出島に住んでいる人がいました。つまらない生活だろうけど、住んだ人がいますよね。だけど、カピタンは1年限りです。戻ってもいいんだけど、連続に住むことはできません。カピタン以外の出島に住んでいる人は、長期滞在の人もありました。

いよいよ本論に近づいてきました。交流のことです。蓑先生がおっしゃったように、長崎から江戸に行くときに、大体途中で普通の宿、つまり旅館に泊まっていて、半分密かでした

けど、人と交流していたんです。また、長崎を出る前にも、やっぱり交流をしていました。

1つ、非常に大きなことがあります。残念ながらほとんど資料が残っていないんですが、やっぱりオランダ人はみんな男性でした。女性が、江戸期ずっと、ほとんど一人も来なかったんです。実は2人、3人ぐらい来ましたが、大体男性だけです。当然ですけども、そういう人たちが日本人のガールフレンドをつくりたかったんです。そういうような付き合いが、本当の恋愛もあったでしょうし、ただの遊びもあったでしょうし。ただ、長崎遊女、長崎の婦人と深い関係をつくったオランダ人がいました。僅か1年間ぐらいの滞在では日本語をマスターすることができなかったんですが、長期滞在の人はある程度日本語を話せるようになりましたし、それと、長崎を含めて、この辺ではチャンポン語がありますよ。半分ポルトガル語と日本語とマレー語とオランダ語が混ざった言葉で、長崎遊女は、恐らくいわゆるオランダ行きの遊女だったら、そういうようなチャンポン語が話せたと思います。

これは西川祐信（にしかわ すけのぶ）という江戸時代中期の人で、たくさんの春画を描いた人ですね。〈図4〉

現代では江戸の絵の世界は春画といいますけど、江戸時代はよく西川絵といいましたね。皆さんの前で春画を見せるのはよくないと思ったものですから、ちょっとこれは。それでも、オランダ人が無理やりに遊女の着物を開いて、体を見ているんですね。

これは全国の遊郭の案内書です。〈図5〉

長崎だけ、オランダのお客さんが恐らく隣の部屋にいるかもしれませんし、あるいは、もしかして遊女にも混血の人がいた可能性があります。書いてありますよね、「長さきゆう郭の図」。これは長崎の特徴です。

残念ながら、本当にこういう交流について、ほとんど記録が残されていないんです。もちろん遊女が随筆とか自分の考えていることを書くことはできなかったんです。オランダ人にとっては、ただの遊びのケースが多かったんです。ただし、このルートで、たくさんの日本の情報がヨーロッパに行き、たくさんのヨーロッパの情報が日本に行ったと思いますし、それと、もちろん小さなプレゼントをあげたんですね。小さな贈物を。そういうルートでも、物が交換されました。

実は1つの資料があるんです。正確な資料じゃないんですが、江戸時代に川柳という詩がありました。川柳は川の柳と書きまして、川柳というのは言ってみればユーモアのある俳句ですね。俳諧。それはいっぱいありますよ。これは3つだけお選びしたので、「丸山や女に読めぬふみが来る」「通事を連れて丸山の客ハ」。「丸山」は長崎の遊郭の名前ですね。「通事」

はもちろん通訳。オランダ語を話せないから恋文を読めないし、そういう問題があって。3つ目は、「丸山の恋ハ一万三千里」。

遠くから来たんですね。そういうようなギャグのものがあります。

遊郭における交流、あるいは遊女が出島に来て泊まった中での交流が1つですが、もう1つは男性同士の交流です。ここに出てくる言葉ですが、通事がありました。通事の役割が本当に大きくて、今日はちょっとだけしか話すことができませんが、1人だけ紹介したいと思います。この図に描かれている、この人間が吉雄耕作（よしお こうさく）という人です。あるいは吉雄耕牛（よしお こうぎゅう）。「牛」の「ぎゅう」で、同じ人です。

吉雄耕牛が通事として働いていて、もちろん代々の仕事ですから、お父さんからもらった通事の仕事をもって、やっと大通事になって、彼が通事の仕事をやりながら、勉強が大変好きな方で、特に医学。やっぱりオランダはいつも専属のお医者さんがいましたから、耕作がそのお医者さんと仲よくなって、彼はものすごくお金持ちになったんです。何でかというと、オランダ人に梅毒の治療のやり方を教わったからです。長崎は梅毒だらけでしたから、それで非常に儲けて、結局、実はあんまりもうけ過ぎて長崎奉行が怒ってしまって、訴えられて刑務所に入れられました。かわいそうに。

とにかく、それは後の話です。この絵では、座っていて、手に洋書を持っていますよね。その洋書に、ちょっと読みづらいですけど、題名が「ヘールコンツ」。つまり、医学。これは本当の本の題名ではないんですけど、彼は医学書物を一生懸命オランダ語で勉強している、という意味です。上に「Yosio Koosak」とローマ字で書かれていて、それとその下に、ちょっと見にくいかもしれませんが、2人の天使を描いていますよね。これはもちろん、西洋の絵画で周りに天使が浮かんでいれば、この人は偉い、という意味です。

この絵を描いたのは、司馬江漢。司馬江漢は江戸中期から、いわゆる蘭画——オランダ風の表現ですよ、蘭画、西洋画の一番有名な画家の1人で、長崎に1回遊学して、やっぱり吉雄耕作と交流して、耕作の紹介のおかげで司馬江漢は出島にも入ることができたんです。非常に貴重な経験でした。

そうすると、女性の交流と、こういう通事の男性の交流とがありました。それでも今まで、長崎の話しかやっていないんです。司馬江漢はわざわざ江戸から長崎に行けたんですが、そういうような長い旅をできる人が少なかったんですね。もちろん時間がかかりますし、お金もかかりますから長崎を直接経験した人は少ないんですが、長崎の絵が本当に多いんですね。

これは、今はイギリスの大英博物館の中にある非常に美しい巻物、2巻です。1つは中国

屋敷の描写です。もう1つはオランダ出島の描写です。「蛮館図」という名前を誰がつくったのか、この巻物には書いていないんです。「蛮館」はちょっと失礼な言葉ですよ。〈図6〉

でも、とにかくオランダ商館の絵で、部分図だけですが、この不明な画家が鑑賞者に見せたかったのは、この人たちが、文化は違うかもしれませんが、野蛮でもないんですね。

右上に食卓です。オランダって、今でもヨーロッパでは食事中に帽子をかぶってはいけません。それは野蛮ですから、帽子を外してフックにかけていますよね、後ろに見えるように。箸ではないんですが、ナイフとフォークですけども、それでも「オランダ式の礼儀がありますよ」と。

左側に、さっき言ったかわいそうな奴隷ですが、音楽を弾いています。恐らく日本人の耳にとって美しい音楽ではないかもしれませんが、音楽というのは儒学にとって四芸の1つですね。琴棋書画（きんきしょが）。音楽のある民族は文明がある、という意味ですから、それを見せた。

下の右側に、2人のオランダ人が挨拶していますよね。僕の若い頃も同じでしたけど、もうあまり男性が帽子をかぶらないんですが、子供のとき、男性が帽子をかぶっていたんですね。道を通るとき、必ず、完全に脱がなくてもいいんですけど、帽子を脱ごうとする動作をしたんですね。それが挨拶、というようなことがありました。

いよいよ、「参府」についてお話ししましょう。参府というのは政府に参ること、毎年行われた長崎から江戸への年中行事の1つでありました。オランダ語では「Hofreis」といいます。

「Hof」は「王室」という意味で、「reis」は「旅」で、つまり「王室への旅」。もちろん将軍は王室だとは言えないだろうけれども、オランダにとって、大体将軍は王か皇帝といえますよね。それは別の話ですが。

長崎から下関経由で、近くにある境港まで船で行きました。毎年、同じ船で行ったんです。その船の名前が「日吉丸」でした。〈図7〉

オランダ語で言えば「Hofreisbark」。「bark」は「船」ですね。「王室の旅の船」。日本語で言えば「参府船」、これは僕がつくった名前ですけども。不思議な面白い言葉です。この船は一年中、大坂にあるんです。大坂の船宿が所有した船です。毎年オランダがそれを借りた。借りたって、もちろんハイヤーしたんですよ、お金を出して。大坂からずっと長崎まで行って、長崎に着くとオランダ式の飾りを掲げて、その後、堺まで戻りました。

オランダの飾りといっても、今の現代のオランダの国旗と同じですね。赤と白と青、それは国旗ですけども、東インド会社のトレードマークが、真ん中の船の旗でよく分かるよう

に、大きなVと、Vの両側にOとCを書いています。「VOC」、それはオランダ東インド会社の、もちろんオランダ語の頭文字です。日本語では「オランダ東インド会社」といいますが、正式名は「統一インド会社」です。もともとオランダの地域別にたくさんあって、実は17世紀に入るとイギリスと競争するために統一しちゃったんです。


だから、「VOC」は「統一東インド会社」という意味で、3人のオランダ人が船に乗っていました。1人はもちろんカピタン。そして、商館専属のお医者さん。途中で人が病気になることがあります。それと、江戸に着くと、徳川幕府が使っていた天文方とか医者とか、そういう人たちがオランダ人と話をするんですから、そういう質問に返事が一番できそうなのは、やっぱり商人ではなくて、ある程度学問をマスターしたお医者さんですね。3人目が秘書です。書記。もちろん途中で商品をリストアップしないといけないとか、プレゼント交換するとかもあります。だから、その3人が日吉丸に乗って、長崎から堺まで行きました。日本人の警備とか通訳とか、付き合った人が大体80人から、毎年同じじゃないんですけど、そういうような程度。ちょっとミニ大名行列でしたね。

堺に着くと、そのまま大坂に来て、大坂で1泊泊まりました。僅かに1泊だけでしたけど、泊まりました。疲れを取るためとかで。それと、船に載っていた物を出して、堺から京都まで、大体かごで行きました。時々、川船で行きましたけど、とにかくこの船でこれより先には行けなかったから、そこで貨物を下ろしました。貨物というのは大体献上物ですね。

ただ、大坂にいる間に1つの重要なことが行われました。江戸から戻るときにピックアップできる特別な注文を、あちこちの職人に依頼しました。

西洋では、大坂の和紙を非常に好んでいたんです。本当に大坂製かどうか分かりませんが、大坂で買ったんです。ヨーロッパで有名な話ですが、画家のレンブラントが日本の和紙を使いまして、きっとオランダ人がそれを大坂で買ったはずですよ。

もう1つは扇です。扇をちょっとエキゾチックなアクセサリーとして西洋の婦人がよく使いました。今日みたいな天気を見ても分かりませんが、もちろん実用的な意味もありましたから、大坂にいる間に、西洋人が好みそうな形とか、あるいはどういう絵を描くかということ踏まえて、そういうものを注文したんです。

もう1つの注文、3つ目の注文はもっとおかしいです。連節の青銅の虫とかカニとかイセエビの模型です。〈8〉

こういうものが西洋の美術館にたくさんあります。大体、今現存するのは明治のものが多いですよ。

変ですけど、でも、西洋人がこういうのを非常に好んだんですよ。これは大坂に注文して、お金を払って、「江戸から戻るときに出来上がっているようにしてください」と頼んだ。戻るまで、3週間ぐらいしか時間がないんだけど、大坂の職人が一生懸命それを作り始めました。

翌朝、あまり休む時間がなかったんですけど、大坂から伏見経由で京都に行きまして、京都にも1泊したんです。残念ながら、大坂のオランダ人用の宿泊の位置ははっきり知られていないんです。

ただ、京都の場合は、それがありません。「海老屋」という名前のところで、京都の割と真ん中の、ちょっと東山のほうにありました。伏見から京都に入る必要は、あまり無いんですけど、ちょっとその辺りに泊まって、その翌朝、東海道に行った。京都にいるとき、僅か1日で東海道に行きました。やっぱり将軍に会うことが目的ですから、だらだらしてはいけません。それはけしからんのです。逆に慌てて行かないと、どのぐらい将軍を尊敬しているかということを見せないといけませんので、そういう戯れの時間は全くありませんでして、もうご存じでしょうけれども、東海道五十三次で行きました。〈図9〉

東海道で、もちろん船が使えませんから、駕籠（かご）です。ミニ大名行列の形だったでしょうけれども、残念ながら絵がほとんど残っていないんです。僕が知っている限り、1つだけです。19世紀の幕末に近い時代に入ると、Jan Cock Blomhoffという人がオランダ・カピタンとして長崎で何年間か暮らしました。実は、彼は密かに奥さんを連れていたんです。めったに女性は来なかったと言いましたが、Blomhoff夫人が長崎に1年間ぐらい滞在していたんですけど、長崎奉行にばれて追い出されたんです。かわいそうに。

ただし、Blomhoffは、もちろんプロの画家じゃないんですけど、自分でスケッチをしていました。〈図10〉

進行方向は左ですね。左の2つ目の駕籠の上に、読めるかな、「Opper Hoff」と書いてありますね。つまり、カピタン、Blomhoff本人がそこに座っていたんです。ちょっと脱線しますが、右側に「Opper Tolk」。「Opper」は英語の「Upper」、「上」です。「Tolk」は「翻訳者」「通事」という意味ですね。だから、これは年番、その年に江戸に行ってオランダ人を担当する通事の駕籠でした。

オランダ人が使っていた駕籠が1つだけ、オランダに残っています。オランダの国立民族学博物館にあります。〈図11〉

面白い。普通の駕籠ですが、1つおかしなことがあります。右側をご覧ください。僕を含めて、西洋人はなかなかあぐらとか正座ができません。足を伸ばしたいんです。足を伸ばせ

るように、こういうふうにしたんです。雨が降るかもしれないから、防水の紙を上貼って。これはとても面白いことだと思います。

長崎から江戸に行った、その年番通事はもちろん毎年違う人ですが、何回も行ったのは、やっぱりさっきご紹介した吉雄耕作でした。本当に、もっと時間があれば、もっと彼の伝記についてご紹介したいと思いますが、彼は、先ほど申し上げましたように、最終的には刑務所に入れられましたけど、でも、その前に面白い研究をたくさん出して、梅毒の治療もやりました。皆さん誰でもご存じの「解体新書」の序文も書いた人ですよ。「解体新書」は、もちろん誰でも分かるように、前野良沢と杉田玄白たちが何年間もかけて翻訳したのですが、面白いのは、長崎大通事に序文を書かせたんです。〈図12〉

ちなみに、ちょっと横道に入りますけれども、「解体新書」は南蛮時代以降、最初に丸々一冊が日本で翻訳された本ですね。それはみんな知っていますけれども、何語に翻訳されたでしょうか。多分100%の人が日本語だと言いますが、解体新書は日本語ではないんですね。

そうです、漢文です。日本語で読むと、失礼な話だけど、女性と子供のためになっちゃうんです。だけど、学問の世界に影響を与えなければ、漢文にしないといけない。面白い。Kaempferが全く同じですね。Kaempferは日本、植物、薬草の研究を出したとき、さっき申し上げたように、やっぱりラテン語で書きました。似たものです。とにかく、「解体新書」の序文は吉雄耕作が書いたものです。

東海道を歩くために大体2週間かかりますよね。江戸時代の人には週間という概念がなかったんですけど、1巡半ですね。15日ぐらいかかります。やってくるときに江戸人が、これは年中行事の1つでしたから、みんなもどきどきしたんです。変わった人の顔。オランダ人が紅毛ですね。長い赤い髪の毛を見たい見たいと思っていて、みんな見にきたんです。しかも、春でしたから、いい季節です。花が出て、みんなも外で時間を過ごすことができるような時期でした。オランダ人が江戸に入るときに春ですから、幸せなことの1つです。

そのことを、有名な松尾芭蕉が書きました。「甲比丹(かびたん)もつくばはせけり君が春」。

オランダ人が、自分のオランダ式のおじぎをするんですね。君が春。将軍様がもう1つの春です、ということですね。松尾芭蕉は、よくそういう俗文化、俗についていろんな俳句をつくりましたが、時々こういう権力のための句もつくりました。「阿蘭陀(おらんだ)も花に来にけり馬の鞍」です。

実は俳諧では、ご存じのように季語が必要ですね。季語を入れないと俳句になりません。

「オランダ」が春の季語です。だから、上の句で「春」という言葉が出てきて、下の句でも「花」の季語がありますけれども、ほかの季語がなくても、「オランダ」だけ言えば春だという意味です。もちろん大坂にも1日しかいなかったんですけど、大体江戸に着くと3週間ぐらい滞在したんです。長くて1か月、江戸に滞在したんですけど、江戸の商人たちがなるべくそれを利用して儲けようとしたんです。

例えばこれは、本当に美術品ではなくて、すごく安っぽい扇ですが、最後まで制作されていないから絵のままとして残っていて、現存するんですね。

たくさん、こういうものがつくられたせいで、捨てられてしまっていて現存しないんですが、オランダ人が、さすが紅毛ですよ。長い赤い髪の毛があって、望遠鏡を利用して遠くを見て、彼が遠くに見えるものは、後ろの背景の丸に入っていますよね。どこでしょうね。日本人が想像した海外の風景ですね。

これも実は江戸文学で有名な浮世草子ですが、「江戸生艶気樺焼（えどうまれ うわきのかばやき）」という楽しい本ですが、絵入り小説で、山東京伝という有名な戯作の小説家が書いたもので、年々知られています。〈**図13**〉

この本は全くオランダとは関係ないんですが、恐らく出版された時期にオランダ人が町に入る時期だったから、出版社から「何かオランダのネタを入れてください」と言われた。そうすると売しやすいですから。これは1ページ目で、右側にのれんがありますよね。右側ののれんがあって、ちょっとVOCマークが見えますよね。切られてしまっていますけれども。全くストーリーとは関係ないんですけど、本を売る為にオランダブームにのったでしようということを出版者が言ったはずですよ。

というのは、出版者が上に記載されています。山の前にツタのマークがありますよね。江戸の一番有名な版元、出版者の1人で、蔦屋重三郎という人ですね。

江戸で、いわゆる「唐物屋」という、海外物を取り扱っている専門店がありまして、大体、唐物というのはもちろん朝鮮半島と明朝、清朝から来た物が多いんですが、オランダの物が入るときになるべくオランダの物売ろうとした。これがもう1つの浮世草子です。これは本当の絵じゃないんです。高津屋ですね。右側に仮名で書いて、左側に漢字で書いています。高津屋、本当にそんなところがあったかどうか分かりませんが、アジア大陸から来たようなものと一緒に、後ろにあるのはオランダの絵ですね。誰かの肖像画、人物像があって、前にはちょっとオランダっぽいディナープレートがあって、ワイングラスもありますよね。

この本について、実は今日はその内容を話す時間がないんですが、すごく笑っちゃうんで

すよ。「中華手本唐人蔵（ちゅうかてほんとうじんぐら）」。内容にもオランダが関係しています。著者は森島中良（もりしま ちゅうりょう）。〈図14〉

森島中良はこの本を出したときに築地善交という違うペンネームを使いましたが、森島中良は将軍が召し抱えていた外科医、お医者さんの弟でした。権力に非常に近い人間で、森島中良とお兄さんは本当に面白い兄弟でした。

行列が町に入って、もちろん品川から入って、ずっと町を歩いて、オランダ人用の宿泊施設が日本橋にありました。「長崎屋」という名前でした。大坂が不明、京都が「海老屋」で、江戸は「長崎屋」です。

これは非常に有名な絵ですが、北斎が1799年に出した、白黒の江戸名所記ですね。名所案内。だけど、すごく売れたせいで、その中の一番面白いところだけを抜粋して、もっと短い本を多色刷りで3年後に出しました。その中にももちろん長崎屋が出てきて、多色刷りですから、オランダ人の赤い髪の毛を見せることができました。〈図15〉

この絵によりますと、もちろん長崎屋の建物自体は一年中そこにありましたけど、実際にオランダ人がいるのは僅か3週間だけでしたから、その間に江戸の庶民がどんどん来て、なるべくオランダ人を見ようとしたんです。

長崎屋についての絵が、残念ながら僕が知っている限り、2つしかないんです。この北斎の絵では、ほとんど建築様式が分からないんです。これはもう1つの、もうちょっと後の広重の絵で、もうちょっと分かりますよね。〈図16〉

それでもよく分からないんですが、一応、割と大きな二階建ての建物です。オランダ人が長崎屋についてたくさんコメントを残しましたが、大体は不満だということを書いてるんです。オランダ人にとってこれは大使館ですから、もっと立派な建物が必要じゃないかと。だけど、日本側にとって、これは野蛮人が将軍の権力を認めにくるんですから、こういうような建物で十分じゃないかと思っていた。ただ、もちろん詳しく建築様式を調べてはいないんです。

さっきの北斎の絵にはテキストがありませんでしたけど、広重の絵には狂歌が書かれています。狂歌。狂った詩、狂歌、たくさん書いていますよね。それぞれの名所に対して面白い狂歌が出てきて、全部解釈する時間がないんですが、1つだけここで紹介したいと思います。

「是のみ通事ハいらず分かるらんカピタンの聞く石町の鐘」。石町の鐘というのは、江戸の一番大きな時の鐘で、日本橋にありました。長崎屋から僅か50メートルぐらいしか離れていないところにある鐘でしたから、オランダ人も聞くことができ、言葉は通じないだろうけ

ど、バーンという鐘の音ぐらいは、誰でも理解することができます。この時の鐘が、石町の鐘が今でも現存しますよ。〈図17〉

今度もし東京に行くきっかけがあれば、日本橋の近くにある公園に行ってみてください。今は、鉄筋コンクリートのやぐらに入れられて、ちょっと見づらいですが。この写真を撮りに行ったときに、右側におじさんが昼寝していたんですね。ずっと待っていたんですよ。だけど、どいてくれなかったから、少なくとも顔が分からないように、こういうふう写真を撮りました。

いよいよ徳川将軍への謁見となると、カピタンのみお城に行って、待たされるんですね。将軍に会うことになったら、その権力を見せるために待たされるんです、半日ぐらい。将軍を見てもいいときになったら、カピタンが、「来い」と言われて、松の廊下を歩いて一之間に入ります。もちろん、歩いては入れないんです、膝で入るんですね。膝で入って、床を見ながらこういうふうに入って。司会が棒をぶわんとして、「オランダ・カピタン」と言います。それを発言した途端に、オランダ人が去っちゃうんです。謁見は30秒もかからないんです。そのためにわざわざ長崎から来た。

ただ、それは儀式です。もちろん、江戸幕府はいつもそういう内々の話がありますから、将軍によりますけれども、本当に熱心に、オランダのことなどをもっと知りたかったという将軍もいましたから、着替えて、普通の役人の格好でもう1回オランダ人に会って、通事経由でいろんな話をしたケースもありました。

もちろん、将軍とオランダ人が一緒にいる絵はほとんどないんですが、これは同じ司馬江漢が描いたもので、空想的な絵だろうけど、2人のオランダ人が江戸城に行く場面ですね。

江漢は洋風の絵師なので、この下のところに、人物の影がありますよね。影があって、それと、遠近法も使っていますよね。前に立っているオランダ人が大きいと、後ろにある江戸城が小さくなってしまいうんですね。その上、オランダ人のお尻の辺です。これはもう無礼ですよ。そのままの絵を江漢が出したなら、多分問題になったと思います。

そういう問題を解決するために、司馬江漢はよく考えていますよね。前に大きな壁を描いていますよね。この前の壁は建築上の意味がないんですが、その壁のおかげで江戸城がオランダ人の上にあります。それは僕の解釈ですけども、こういうような絵を司馬江漢は作りまして、やっぱり「オランダ人」が春の季語ですから、この絵を春に飾ることができたと思います。

謁見のときに、オランダ人がもちろん献上物を将軍にあげる。年によりますけど、毎年、

ちょっと将軍を喜ばせるための珍しいものを、オランダ細工とか望遠鏡とか顕微鏡とか、あるいは本、リボンとか、あるいは布とか、時々、ラクダだとかクジャクとか、そういうものを献上したんです。返礼は、毎年同じです。10枚の着物。男性用の着物です。男同士の贈物ですから、女性用の着物はもちろんあげません。そういう将軍がくれた着物を大事にしてオランダに持って帰って、東インド会社が非常に高く売ったんです。

オランダで、日本の着物は上着として使われたんですね。もちろん下に洋服を着ましたけど、上に着物を着て。絹ですからあんまり厚くないだろうけど、室内用の上着でした。やっぱり昔は部屋の中でも寒かったかもしれませんから、オランダは室内でも寒いときが多いですから、部屋に持っていて、ちょっと心身を休ませているときにする格好でした。まさか着物を着て働きには行かないんですけれども、自分のうちで書齋に入って、友達と一緒にちょっと偉い会話をしたりするとか、そういう場面では日本の着物がとてもふさわしくて、オランダの肖像画にも時々出てきます。有名なオランダの商人とか役人が、うちで休んでいるときに日本の着物を着ています。

それが終わって、東海道をUターンして、京都まで戻ります。京都に着くと、今回は急いでいないので、ちょっとゆとりがあって、観光することもできました。一番最初にオランダ人が行ったのは、やっぱり京都は食べ物がおいしいですから、食べに行ったんです。

何を食べたかという、京都の有名な豆腐。ほとんど毎年同じ、祇園にあった二軒茶屋。二軒茶屋は二軒ですから東と西があって、オランダ人は大体毎年、東に行っていました。何で東で、西ではなかったのかはわからないんですが。これは秋里籬島（あきさと りとう）というたくさん名所案内を書いた著者の本ですね。〈**図18**〉

絵は他の人に任せましたが、その秋里籬島の「拾遺都名所図会（しゅうい みやこめいしよずえ）」という本に、京都の名所の1つは二軒茶屋の豆腐屋であることと、やっぱり年に1回オランダ人が行くことを、絵にしてあるんです。座っている2人のオランダ人が見えますよね。女性が豆腐を切って、祇園が近いですから鳥居があって、鳥居のちょっと後ろからのぞいている二本差しの武士階級の人が、周りから見られないように帽子をかぶっていますけど、そういうような場面です。〈**図19**〉

これも上にちょっと面白いことを書き込んでいますよね。これはちょっと切ないんですけど、読みます。「阿蘭陀が細工にいかぬ我国の 祇園の豆腐のやわらかさに喜ぶ」。

普通、やっぱり大坂にいるときと同じように、京都にいるときもあちこちに行って、輸出するために細工の製作を依頼するんですが、そういう青銅で作った硬い細工より、軟らかい

豆腐をオランダ人が食べて喜んだだろうというキャプションですね。

祇園の二軒茶屋の豆腐屋さんが非常に有名で、江戸にも支店がありました。これは歌麿の絵ですが、同じ祇園の豆腐です。「婦人手業拾二工（ふじんでわざじゅうにこう）」というシリーズです。

それは楽しいことでしたが、その後はお寺参りをしたんです。やっぱり西洋で日本の2つのお寺が有名だったようです。1つは三十三間堂です。すごいところですよ、今でも現存しています。もう1つは、残念ながら現存しないんですが、京都大仏。京都大仏は、江戸中期に焼失しちゃったんですけども、すごい建物でした。秀吉が造ったものですね。そのときには、まだありましたから、オランダ人がそれを見に行っただけです。

その大仏の前に、いわゆる耳塚がありました。耳塚は、ちょっと悲しいことですが、秀吉出兵のときに囚人になった朝鮮人の耳と鼻を切って、持って帰ったんですね。だから、半分は戦争記念碑、半分はやっぱり死んだ朝鮮人が幽霊として出てこないように、ある程度、供養のためのところなんです。

左は僕が京都で撮った現在の様子の写真ですが、オランダ人がこれを見に行っただけです。

〈図20〉

同じ秋里籬島が作ったもう1つの「都林泉名所図会（みやこりんせんめいしよずえ）」に出てくるんですが、籬島の本は全部もちろん和文ですね。誰でも簡単に読めるように。ただ、この本が、この1か所のみ、いきなり漢文になっています。これは非常に堅苦しい、恐ろしいところですから、やっぱりしっかりしておかないといけないということを彼が決めて、漢文にしたようです。〈図21〉

京都で2、3泊ぐらいして、大体は豆腐を食べて、お寺を見たりして休んだだけです。残念ながら、たくさんのオランダ人が「お寺参りはとてもつまらない」と言いました。やっぱり日本に文化を調べにきていないんですね。日本の文化に興味を持っているから日本にやってきましたじゃなくて、儲けるために行っただけなんです。儲けて、なるべく早く帰国して、大きな屋敷を買いたかったんですね。中には、ちゃんと鑑賞できた人もいたんですけど、全員がそうではないんです。

もちろん、京都の後は大坂に戻りました。帰りは、もうちょっとゆっくり大坂に泊まることができました。大体2、3泊ぐらいしかできなかったんですが、それをしたんです。大坂で一番最初に見学に行ったのは、大坂の銅座です。やっぱり日本から輸出したもの、一番重要な輸出品が青銅ですね。銅です。この銅座で、来年度にいくら輸出できるかということ

聞くんです。来年いくら輸出ができるか分からないと、どのぐらいのものを持ってこないといけないか分からないんですね。交換ですよ、もちろん。売らないんですよ。オランダ人が海外から持ってきたものは売らないんです。銅と交換するんです。どのぐらい銅をもらえるかが分からないなら、来年度、どのぐらいものを持ってくるべきかが分からないんです。

もちろん今は現存しないんですが、この写真が現在の様子で、今は記念碑があります。

〈図22〉

地図でいうと、北浜の、ちょっと白い四角形の中の、この辺りです。銅座を見てから、京都と江戸でできなかったことを大坂でやりました。芝居を見に行っただけです。歌舞伎についての鑑賞文が、結構たくさん残っています。僕が知っている限り、歌舞伎の研究者はオランダの文献をあんまり使っていないと思います。時々、俳優、役者の名前も出てきます。大体、芝居がどういう様子だったかとか書いています。もちろん、それが書かれた年代が分かりますから、そういうようなことも歌舞伎の研究者にちょっと目を通してほしいと思いますけれども、とにかく歌舞伎を見ていたんです。

それともう1つ、歌舞伎は大坂にも京都にありましたけど、ある芝居は大坂にしかなかったんです。人形浄瑠璃だと言いたいんですけれども、そうじゃなくて、からくり劇場がありました。大坂の竹田近江機振劇場（たけだおうみからくりしばい）が大変有名で、オランダ人が毎年行って鑑賞していたんです。〈図23〉

これは場面の上に2つのからくりがあるようですね。右側に諫鼓鳥（かんこのとり）ですね。本当に太鼓の上に鳥が座って。これは平和のシンボルですよ、日本でも中国でも韓国でも。だけど、このからくりでどうやっているのか分からないんですけども、鳥が下りてきたんですね。すごいからくりですよ。その仕組みは分かりません。左側に卓上のからくりで、恐らくそれは船弁慶か何かかな。船があって、波の中に立っている、やりを持っているつわものがいて、ちょっとよく分からないんですが、そういうような絵です。

キャプションは、「阿蘭陀も足も屈まぬ目で見れば 天地も動く竹田からくり」。オランダ人が、連節の虫の模型を買いにきたというのに、自分の足は曲がらないんですね。日本人みたいに座れないんですから、椅子のように座っています。そういう冗談だと思います。オランダ人は体が硬いので座れないんです。とにかく、秋里籬島の大坂の名所図会ですね。「摂津名所図会（せつつめいしよずえ）」。竹田近江（たけだおうみ）は大坂の劇場でしたけど、時々江戸に出稼ぎに行きました。これは北斎の有名な絵本、「隅田川兩岸一覽（すみだがわりょうがんいちらん）」という多色刷りの案内記ですが、この2つの見開きで、両国橋の周辺

の見世物小屋へ行っています。左のように、恐らく分かりづらいでしょうけど、「竹田大からくり」と書いてありますね。大坂のものが来た、と。〈図24〉

それと、最後のお昼。もう1回船に乗って、長崎に帰る直前で、オランダ人がお昼をごちそうになりました。大体、毎年同じ料亭に行きました。それは、大坂の一番の料亭の1つで、「浮瀬（うかむせ）」という店でした。「浮瀬」。「浮」かぶ、潮の「瀬」ですね。左側は、どうしてか分からないんだけど、冬の風景です。これは同じ、さっきお見せした「摂津名所図会」です。〈図25〉

もう1枚は夜です。料亭ですから夜に行って、飲みながらわいわいしたケースが多かったはずなのですが、恐らくオランダ人はここでランチを食べたんです。もちろん現存しないんですけども、現在の地図でいうと四天王寺よりちょっとだけ北にあったんです。そこでごちそうになってから、日吉丸に乗って下関経由で長崎に戻りました。〈図26〉

もうそろそろ時間になりますが、最後のスライドをお見せしたいと思います。オランダ人がもちろん多かったんですが、鎖国という言葉をつくったKaempferはドイツ人でしたし、それと、恐らく日本に対して一番面白い鑑賞文を残したのは、スウェーデン人のオランダ附属のお医者さんで、カール・ピーター・ツンベルグという人です。

ツンベルグという人間は学者で、日本に来た中では、一番学問に精通している人です。有名な本草学者のスウェーデン人であるリンネの弟子で、リンネは彼に「日本に行って、日本で植物を勉強しなさい」と。Kaempferの本が有名でしたが、Kaempferの植物図譜がもう100年も前のものとなって古くなっていましたから、勉強しなさいとツンベルグが先生に言われて、わざわざ日本に来た。カピタン専属の医者じゃないと日本に入る方法がないですから、彼は何年間もバタビアでそのポストが空くまで待っていたんです。空いた瞬間に長崎に来て、1年間長崎に滞在して、1回だけ参府に参加して、面白い記事を残しました。

今日紹介したいのは、彼の長崎に対してのコメントです。「この町には丸2日間滞在しました。この旅で最も楽しい経験をしたのは、この町でした。ここには珍しい物事が本当に多い。多くの裕福な人々が、ここに引っ越ししてきて財産を使い切ってしまう。なぜかという、ここは日本の一番ゆかいな町だからです。言ってみれば、日本にあるパリでしょうか。楽しみは尽きることがありません」。

僕は京都に住んでいますから、これからずっと、大坂についてツンベルグの言っていることがどのくらい正しいかということを経験していきたいと思います。

それでは、ご清聴ありがとうございました。